

〔資料紹介〕

㊦ 大蔵虎清狂言伝書

㊦ 大蔵虎明伝授目録

小田幸子

解題

凡例

『大藏虎清明狂言伝書』

『大藏虎明伝授目録』

解題

本稿は、山本東次郎家が所蔵する二巻の狂言伝書の翻印である。他の伝書類との混同を避けるため、翻印にあたってあらたに書名を付けた。以下、それぞれに解題を加える。

『大蔵虎清狂言伝書』一巻。原題「覚」

高さ一七九mm、長さ一〇九cmの卷子本。薄茶地に紺草花文様織出し緞子表紙。題簽なし。見返し金銀箔砂子散らし。青紫紐。全体に後代の改装が施されており、高さ一四五mmの料紙六枚分を厚手の楮紙（裏面響水引き）に貼り直している。継ぎ目には裏から黒印を押す。黒印は奥書の印と同一。表紙と軸も後装。

本文は平仮名書き主体。虫損と文字の摩滅が若干ある。

冒頭に、「覚」として全体の内容を小見出し風に記した序的な記事を置き、改めて「覚」と題記して本文が続く。末尾に、「右此割り八言葉にて伝来り候へども、如此書渡シ申候間、一子のほかに努々他言あるまじく候。もし他言あらば、家の冥加につき家続き可^レ申間敷者也。中風にて腕震い申候間、やうく^レ仮名書きいたし相伝仕者也」（漢字を宛て濁点を施した）の識語と、寛永十八年（一六四一）三月三日、大蔵弥右衛門虎清から次男の大蔵八右衛門（清虎）に相伝する旨の奥書がある。伝存する虎清自筆文書の筆跡・黒印・花押等から判断して、本文・奥書ともに虎清の自筆になることが確実視される。（一九〇頁に冒頭と奥付の図版を掲出した。墨が薄いため、文字色に対して若干の画像処理を施してある）

内容は、全十二箇条にわたる狂言の心得・教えを、「六輪（りくりん）」・「六脈」・「曲尺（かねわり）」の三項目に分けて記述したもので、具体的な型付というより、一種の狂言理論書といふべき述作である。

論の大半を占めるのが「六輪」説で、狂言の教え、役者としての心得等を、「陰陽・りつめ・大かく・たいゆふ・ないゆふ・ふへん」の六項目に配して説く。「六輪」といえば、金春禅竹の「六輪一露」説や、室町後期の能伝書『舞芸六輪』などが想起される。著者自身も能の六輪説には何らかの知見を持っていたようだが、狂言の「六輪」はそれとは異なると断っており、内容上も、直接には能の六輪とは関係なさそうである。全体は、特殊な理論に基づいた難解な説ではない。幕の内の心がげや、「打つたる博打」などは、離子伝書や能伝書類にも記されるところであり、その他の所説にしても、一般的な内容である。自説の権威付けのために、六種に適宜配当したというのが実情ではなからうか。

やや気になるのは、第二条(「大かく」とするが、順序からいって「りつめ」のはず)で、書物の知識だけに基づく芸では、宇宙自然の道理にあわず、結局家が廢るとの趣旨を、強い調子で戒めている。何者かに対する批判が背後にこめられているかもしれない。

六脈は、漢方医学にいう「心・肝・腎」(左手で取る脈)と「肺・脾・命門」(右手でとる脈)の六種の脈を指すようである。能の伝書では、五行を方角・味覚・色彩に配当する説が一般的であって、六脈と関連づけた説は、珍しい。「六」の数字にたいするこだわりか、あるいは、五体の上位にあつて生命を束ねる「命門」の概念を援用する意図であるうか。いづれにしても、虎清の知識の源泉をつかがわせる。

「かねわり」は、目付(目線)に関する説である。虎明の『代伝抄』に「狂言間に、古と遠近の間、いにしえいま、遠き近きの分かち也。口伝有り。尤目付にも色々」とみえており、『大藏虎明伝授自録』にも「狂言間之物第一曲尺定之事」との項目がある。主として間狂言に関わる習であったことが知られる。

狂言のまとまった理論書としては、虎明の『わらんべ草』(万治三年最終稿成立)が知られているが、本巻の成立は、それより二十年ほどさかのぼる。比較的短文とはいえ、理論書としての性格を備えた最古の狂言伝書として注目

される。

虎清は、晩年の寛永十四年頃から、次男清虎に別家八右衛門家を樹立させるべく、多くの書を著したようで、そのうちの数種が伝存している（『大蔵虎清父子自筆文書』、『日本庶民文化史料集成』第四巻「狂言」参照）。本巻も、そうした状況で執筆されたものと推測されるが、これまで存在が知られておらず、伝来の経緯なども不明である。大蔵松之介著『大蔵家之記』には、明治三年に松之介が伝来の書物を整理した際の目録があるが、紛失分も含めた道倫（虎清）伝来の書の中にも、本巻に相当する記述はみられない。本巻は、虎清自筆文書として貴重であるのみならず、大蔵家の家督相続をめぐる歴史資料としても、高い価値を有するものである。

「中風にて、腕震い申候間、やうく仮名書きいたし」と断っているように、虎清は執筆当時中風をわずらっており、本文の大半は、震えが目立つ平仮名書きである。翻刻には平仮名をそのまま生かしたが、通読の便を考慮し、別に校本を付載して参考に供することとした。可能な範囲で漢字を宛て、濁点を施し、摩耗のため判読不可能な箇所にも、しかるべき文字を試みに宛てた。ただ、意味不明の語も少なからず存し、誤りもあるつかと懸念している。大方の叱正を乞う次第である。

『大蔵虎明伝授目録』一巻。原題「傳授之目録」

高さ一九七mmの卷子本。濃紺表紙。題簽なし。黒軸。白緑茶の組紐を用いる。見返し白地（虫食アリ）。料紙は厚手混漉紙で、雲霞を上方に配し、彩色秋草を数力所に描く。紙継は四力所。長さ二〇〇cm。

冒頭に「傳授之目録」と題記し、一つ書形式で、式三番以下四十三箇条の習事の項目を記した後、二行分ほど空白を置き、「右之外心持之習共在之事」として、計三十八番の能曲名を列記する。末に、「右之大事習共金春四郎次郎殿ヨリ代々傳授也。後世予力家次之一子二為談合其方へ不殘令傳受者也」との識語に続けて、万治三年（一六六〇）正

月、大倉弥右衛門虎明から、大倉助左衛門へあてた相伝奥書がある。書体・花押から判断して、本文・奥書ともに大蔵虎明の自筆と認められる。

この伝授目録は実質的には免許皆伝を意味する印可状と考えてよいだろう。狂言関係の印可状の類として、大蔵虎清から虎明に与えた大蔵弥右衛門家蔵『狂言印可状』が、最近、関屋俊彦氏によって紹介された（『能と狂言』創刊号掲載予定。二〇〇三・四。能楽学会発行。ペリカン社）。それと対比させてみると、本巻は相伝相手が家督継承者ではないこと、伝授目録としてより整備された形式をそなえており、習の項目も格段に多いこと、式三番口伝など共通の項目もあるが、むしろ大半は一致しないこと、などが挙げられる。識語によれば、虎明は、将来大蔵弥右衛門家の「家次之一子」のサポート役たることを期待して助左衛門に狂言の「大事習」を伝授したという。本巻の奥書が書かれた万治三年の十二月には『わらんべ草』の完成をみ、翌寛文元年（一六六一）に家督を子の弥太郎栄虎に譲ったのち、翌年の正月に虎明は六十六歳で没した。これらを考慮すると、識語の文言は形式的なものではなく、文字通り受け取ってよいかと考える。家督を継いだ栄虎にも、これらの大事習は実質上伝授していたと推測されるが、伝授目録としては伝わっていない。家督譲渡の一環として、いわば予備証明書のような意味で秘伝伝授がなされたとすれば、家の存続に用意周到であった虎明の姿勢がうかがわれるところである。

大倉助左衛門は、大蔵家の血縁者とも考えられるが、大蔵家の系図類には名前がみえず、経歴等はあきらかでない。『古之御能組』に、栄虎や同じく虎明の息子である長太夫、大蔵八右衛門らと共演している人物に「助左衛門」の名が二度みえる。以下に、その番組の年月日・場所・並びに助左衛門が演じた曲名をあげておく（「江戸初期能番組七種」、『能楽研究』18・19・24号所収による）。

万治二年（一六五九）四月四日 南都興福寺一乗院門跡得度祝賀能

煎物・入間川・花子・子盗人・三人片輪 の全五番のアド役。シテは曲順に、八右衛門・長太夫・弥太郎・弥太郎・長太夫。

万治四年（一六六一）一月八日 大蔵弥太郎（栄虎）宅狂言初め

全九番のうち、鼻取相撲 のシテ。共演者は弥太郎・千太郎・小太郎・長吉・弥次兵衛・長左衛門。

年代的にみても、共演者の顔ぶれからみても、この助左衛門を、大倉助左衛門と同一人物とみて矛盾はない。ただ、相伝状を与えられるほどの人物でありながら、右以外には名前があらわれないなどの、疑問が残る。たとえば、明暦元年（一六五五）三月に虎明・栄虎父子が興行した歎進狂言の記録たる「明暦堺七堂狂言芝居」にもみえない。

目録所載の習を概観して第一に気づくのは、本狂言が「釣狐」と「花子」の二番と数少なく、式三番と間狂言に集中している点である。作品ごとの習だけでなく、「間の枕詞」や「曲尺」など間狂言全般にわたる大事も記されている。虎明著『代伝抄』でも間狂言はそうとう重視されているところであり、狂言の「習」は、能と密接にかかわりを持つ式三番と間狂言とを中心に、形成・整備されていったことを思わせる。習事の具体的な名称は、「町積・菓草喻品・那須与一」など数は多くはないが、「白楽天弓之舞・難波笛之段の習」など、内容を推測させる記述もあり、間狂言研究の根本資料のひとつとして有益である。

本稿に関して、山梨大学の橋本朝生氏からご教示をいただいた。また、全般にわたって、高桑いづみの協力を得た。『大蔵虎清狂言伝書』図版の画像処理は、松村智郁子の作成である。それぞれ、記して感謝する。最後に、貴重な文書の調査と翻刻を快諾して下さった山本東次郎氏に、深く感謝申し上げます。

凡例

原本を忠実に翻刻することを原則としたが、読みやすさと印刷の制約を考慮し、次のような方針に従った。

- 一、漢字・平仮名・片仮名の区別 および仮名遣い・送り仮名は原本のままとした。
- 一、漢字の旧字体・異体字は、原則として通行のものに改めた。
- 一、句読点を加えた。濁点は、原本の通りとした。
- 一、墨筆による訂正の類は「」で囲んで、しかるべき箇所に移した。
- 一、脱字、虫損や磨耗のため判読困難な箇所などは、校訂者の判断により、適当と思われる文字を（ ）で囲んで補った。推定困難な字には右傍に？を付した。
- 一、判読不能な文字には を宛てた。
- 一、『大蔵虎清狂言伝書』は、原本の翻刻に続けて、校訂者が適宜漢字を宛て濁点・送り仮名を施した校訂本文を参考のため掲げた。
- 一、『大蔵虎明伝授目録』は、上段に写真を掲出し、下段の翻刻と対照できる形をとった。

『大蔵虎清狂言伝書』

覚

一 りくりん 六ツのわとかく也。六ツ二わる也。

一 六ミやく

一 かねわり

一 りくりん 六ツわり 一、第一天地めんやう 一、第二りつめ 一、第三大かく 一、第四たいゆふ

一、第五ないゆふ 一、第六ふへん也

六りんの六ツのな

かねわり五ツのな

六ミやくのかす

三合拾貳ヶ条也

うてふるい書事ならず候へとも、やうくかなかきにつらね申間、のちのよのわらいくさたるへし也。

覺

一 六りと八六ノわと書。

一 第一能二用、ぜんたうのわ也。口傳多シ。狂言二用、口傳、六ツ二わる也。

一 第一みんやう五行也。水と火と木とかねとつちと也。此わりのこゝろ、天八やう也。人のしうもやう也。地と下人と八みん也。天よりほとこしたまふやうを地にうけて、さう木五こくまでそたつことく、そのくらいをぶんべつし、おとこ八みんなり。おんな八やう也。ふうふみんやうわかうして、人間のさかへ候ことく、あとゝしてとのわかちありて、それくのくらいをたゝして、よしといふこゝろもち、かん用の事也。天地みんやうといふ也。

一 第二大かくといふ事八、そのむかし八何事もことはにてつたへ来り候を、中こう、もしとなへうしなふ事ありて八、其家のならい、したいにすたり候八んと申て、かきおきたりしを、それにて家をつき候八んとて、ひみつ所のをもしらで、げだいかくもんにていたさは、五行をやふり、むりなる事をほくして、火にてうるをし、水にてものをやり、天地さかしまになすかことく、その身のげい、くらいあしく、しだひくにその家おとるへし。万事にたとへて、ぶんべつかん用といふ事八、げい仕やう、下人八しうにしたかい、女八おつとに、子八おやにしたかい、弟子八ししやうにしたかうがことく、それくのくらゐあるへし。そのいたしやう八、木のミを今日うへて、明日はなさきミのなるやうの事いたし候へは、天地さかさまになすかことくなり。したいくに、ゑたはさかへて、はなさきミのなるかことく、つねに心かけてたしなミ仕様、ことに、としこるをかんかへ、そのくら(い)くをかんかへ、いしやうのくらいをぶんべつしていたす事、おゝかるへし。人八ともいへかくもいへとて、かきやぶりに、むかしのおしへ、いひつたへをそむく八、五行をそむきぬる八、天地さかしまになして、水にて物をやくかことく、むりのむり也。物ことにすじめだつりにあい申やうに、としのくらい、りくぎ、てに(は)をぎんミして、ミもへにはなのさかぬやう

かん用也。これ、りつめたんトいふ也。

一 第三の大かくといふ八、まつその身のおさめやうかん用にして、その身の(かく)ありて、人にうやまハれ、そのミちくのししやうとなる人を、大かくといひて、人の上におく也。これ第一の心もち可有事也。大かくといふ也。

一 第四に、狂言にかきり、人間之身の上のことを仕事なれば、おやこいたす事二、ふうふの間の事、されたる事も仕る事おほし。其時成共はず、わかてまへおやなり共、おとしい成共、むかしからの事なれば、おめす、はくからず、人におとるまし(き)とこころつよく仕るを、たいのゆふといふ也。

一 五に、(ま)くのうちにて心をしつめ、よくふんべつして、ぶたいにてうらたへぬやう(に)、かくこをして、心おちつくる事かん用なり。殊ニふだんよるひるの心かけを、まくのうちと八申也。人の心ひるハやうにして、心おちつかぬもの也。よるハみんにして心おちつきて、わすれたる事もおもひいたさるゝもの也。此五のたんを、ないゆふといふ也。

一 六に、うつたるばくちといふ事。たとへば、かならず、わすれたる事もあり、どまくれた事もあれば、おもひすてずして、いまのハくとおもひ、それよりさきをとりはぐれて、のちあしくなるものなり。ことに三ばさつの中にも萬二あるもの也。心にかゝる事をはたとおもひすてゝ、さきをよきやうにする事かん用也。これ一大事のひしよ也。うつたるはくち八とりかへされず、わすれたる事も、あとへハもとされず。此たんを、(ふ)返といふ、ふへん也。

りくりん 六ツのな的事

一 第一天地ぬんやう 一 第二りつめ 第三大かく 第四たいゆふ 第五ないゆふ 第六ふへん也。

一 六ミやくの次第

左

(声)	にかし	あかし	ミナミ
かん	すし	あおし	ひかし
じん	くろし	水也	しはゝゆし
はい	からし	白し	かね
火	あまし	きいろ	つち
(めい)もん	(しん)也	にかし	あおし
			ミナミ
			中わ(う)

右、六ミやくそろへは、むひやうなるかごとく、かしら、両のて、こし、目付、(両)のあし、五いろのさため、かん用也。めいもんのミやくハ、ゐ(の)きのミやくなれば、五たいのくすれぬやうにと、たとへおきたる所のしさいハ、人間の五たいくするれば、しするゆへ、ふきつにいふ也。ひやうし(ふミ)候とも、五たいにてふまぬもの也。ふたいまハるときも、こしのすハリ(たるか)ミてよし。かたかさかるか、ちんばひくやうにミ候へは、六ミやくのうち(としゆ)あるがごとく、やまいありといふ也。その引事に、六ミやくとかき出せる也。

一 かねわり第一之事

はしかゝりの目付のかね、二間三間之間ならは一間半たるへし。四間ならは一間ほと(さ)きさたるへし。五間ならは三間のうち、七間八おなし。八間九間十間も三間さきたるへし。

一ふたい四(本)はしらの目付、ふたいさき半よりうち也。

一(ここん)ゑんきんのかね第一なり。

古八ふる 物をミル。今八(いは)のことちか(ミ)目付也。

遠八とおき目付、あるい八川こし、あるい八とをやまかミこし。

近八ちかき物をミル目。

あるひ八、ここんゑんきん八、かねわりによるべからず。万事二入こと、これにはつれ(たる事)なし。ことに御前のふたいにて八、御前のお(ち)ゑんに目付よし。ちかき目付、ぶあくの、うをゝとるいけなど、ふたいのうちをゝしへ、おしくさにてとる間をおしゆることくなるべし。又なへ八はちの、いちをゝしゆる八、大しんはしらのさきから、してはしらのさきまでをしゆる。このやうなる事を遠きかねといふ也。とおき所八とおきやう、とかくふたんのこゝろかけ、それくのふんべつ、此かき物にていたし候八、わたくし八あるましく候也。これかねわりの五ツのうち也。

六りん、六ミやくのなのかす、合七ヶ条也

かねわり、古今遠近、合五ヶ条

古合拾貳ヶ条也

右此わり八、ことばにて傳來り候へとも、如此書渡シ申候間、一子のほかにゆめくたこんあるましく候。もしたこ
んあらは、家のミやつかにつき、家つゝき〔七〕可申間敷者也。ちうふにてうてふるい申候間、やうくかなかきいたし相
傳仕者也

大蔵弥右衛門（黒印）

寛永拾八年〔巳〕の三月三日 虎清（花押）

同八右衛門殿

まいる

覚

一 六輪、六ツの輪と書く也。六ツに割る也。

一 六脈

一 曲尺

一 六論 六ツ割り 一、第一天地陰陽 一、第二理詰 一、第三大宇 一、第四たいゆふ

一、第五ないゆふ 一、第六普遍也

六輪の六ツの名

曲尺五ツの名

六脈の数

三合拾貳ヶ条也

腕震い、書く事ならず候へども、やうく仮名書きに連ね申す間、後の世の笑い草たるべし也。

覚

一 六輪とは、六の輪と書く。

一 第一能に用、禅道の輪也。口伝多し。狂言に用、口伝。六ツに割る也。

一 第一陰陽五行也。水と火と木と金と土と也。此の割りの心、天は陽也。人の主も陽也。地と下人とは陰也。天より施し給ふ陽を地に受けて、草木五穀まで育つことく、その位を分別し、男は陰なり、女は陽也。夫婦陰陽和合して、人間の栄へ候如く、アドとシテとの分かちありて、それぐの位を正して、よしと言ふ心持ち肝要の事也。天地陰陽

と言ふ也。

一 第二大学といふ事は、その昔は何事も言葉にて伝へ来り候を、中興、もし、唱へ失ふ事ありては、其家の習い次第に靡り候はんと申して、書き置きたりしを、それにて家を継ぎ候はんとて、秘密の所をも知らず、外題学問にて致さば、五行を破り、無理なる事をほくして、火にて潤し、水にて物を焼き、天地逆しまになすがごとく、その身の芸位悪く、次第く、その家劣るべし。万事に喩へて、分別肝要と言ふ事は、芸仕様、下人は主に従い、女は夫に、子は親に従い、弟子は師匠に従うがごとく、それぐの位あるべし。その致し様は、木の実を今日植へて、明日花咲き、実の成るよふの事を致し候へば、天地逆さまになすがごとくなり。次第く、に枝葉栄へて、花咲き実の成るがごとく、常に心がけて、たしなみ仕る様、殊に年頃を考え、その位くを考え、衣装の位を分別して致す事、多かるべし。人はとも言へかくも言へとて、書き破りに、昔の教へ言ひ伝へを背くは、五行を背きぬるは、天地逆しまになして、水にて物を焼くがごとく、無理の無理也。物事に筋目、道理に合い申すやうに、年の位、六義、てにはを吟味して、みもへに花の咲かぬやう肝要也。これ理詰め段といふ也。

一 第三の大学と言ふは、まづその身の修めやう、肝要にして、その身の学ありて、人に敬はれ、その道くの師匠となる人を、大学と言ひて、人の上に置く也。これ第一の心持ち可有事也。大学と言ふ也。

一 第四に、狂言に限り、人間の身の上のことを仕る事なれば、親子いたす事に、夫婦の間の事、戯れたる事をも仕る事多し。其の時成共、恥ぢず、わが手前親なり共、弟兄成共、昔からの事なれば、おめず、憚らず、人に劣るまじきと、心強く仕るを、大のゆふと言ふ也。

肺	腎	肝	声	一
			左	六脈の次第
辛し	黒し	酢し	苦し	
白し	水也	青し	赤し	
金	鹹ゆし	東	南	
西	北			

六輪、六ツの名の事

- 一 第一天地陰陽
- 一 第二理詰
- 第三大学
- 第四たいゆふ
- 第五ないゆふ
- 第六普遍也。

一 六に、打つたる博打と言ふ事。たとへば、必ず忘れたる事もあり、どまくれた事もあれば、思ひ捨てずして、今のはくと思ひ、それより先を取りはぐれて、のち悪くなるものなり。殊に三番叟の間にも、萬に有るもの也。心にかゝる事をはたと思ひ捨て、先を良きやうにする事肝要也。これ一大事の秘所也。打つたる博打は取りかへされず、忘れたる事もあとへは戻されず。この段を不返と言ふ、普遍也。

一 五に、幕の内にて心を静め、よく分別して、舞台にてつらたへぬやうに覚悟をして、心落ちつくる事肝要也。殊に、普段夜昼の心がけを幕の内とは申す也。人の心、昼は陽にして心落ちつかぬもの也。夜は陰にして心落ちつきて、忘れたる事も思ひ出さるゝもの也。此五の段を、内ゆふと言ふ也。

火	甘し	黄色	土	中(央)
命門	(しん)也	苦し	青し	南

右、六脈揃えば無病なるが如く、頭、両の手、腰、目付、両の足、五色の定め肝要也。命門の脈は息の脈なれば、五体の崩れぬやうにと、喻え置きたる所の子細は、人間の五体崩るれば、死する故、不吉に言ふ也。拍子踏み候とも五体にて踏まぬもの也。舞台廻る時も、腰の据はりたるが、見てよし。肩が下がるが、ちんば引く様に見へ候へば、六脈のうちに、度数あるが如く、病ありと言ふ也。その引事に六脈と書き出せる也。

一曲尺第一之事

橋掛りの目付のかね、二間三間之間ならば、一間半たるべし。四間ならば、二間ほど先たるべし。五間ならば、三間のうち、七間は同じ。八間九間十間も三間先たるべし。

一 舞台四本柱の目付、舞台先半より内也。

一 古今遠近のかね第一なり。

古はふる 物を見る。今は(いは)の(こ)ち(ミ)目付也。

遠は、遠き目付、あるいは川越し、あるいは遠山が見越し。

近は近きものを見る目。

あるひは、古今遠近は曲尺によるべからず。万事に入こと、これに外れたる事なし。殊に御前の舞台にては、御前の落ち縁に目付よし。近き目付、武悪の魚を取る池など、舞台の内を教へ、押草にて取る間を教ゆることくなるべし。又、鍋八撥の、市を教ゆるは、大臣柱の先からシテ柱の先まで教ゆる。このやうなる事を遠きかねと言ふ也。遠き所

は遠きやう、とかく普段の心がけ、それぐの分別、此の書き物にて致し候はば、わたくしはあるまじく候也。これ、曲尺の五ツのうち也。

六輪、六脈の名の数、合七ヶ条也

曲尺、古今遠近、合五ヶ条

古合拾貳ヶ条也

右此割りは言葉にて傳来り候へども、如此書き渡し申候間、一子のほかにゆめく他言あるまじく候。もし他言あらば、家の冥加につき、家続き申間敷者也。中風にて腕震い申候間、やうく仮名書きいたし相傳仕者也

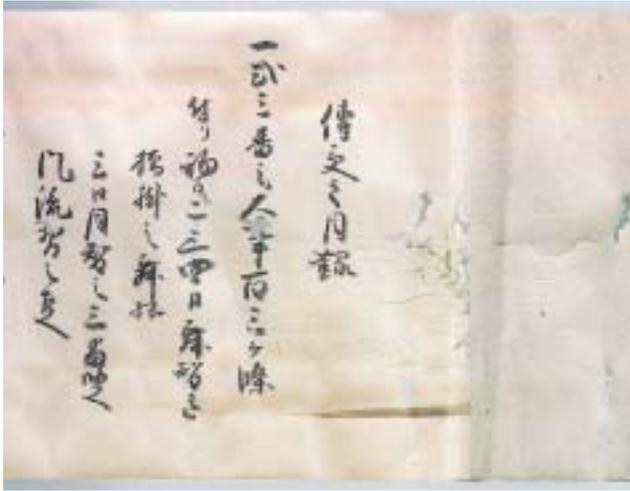
大蔵弥右衛門（黒印）

寛永拾八年巳の三月三日 虎清（花押）

同八右衛門殿

まいる





『大蔵虎明伝受目録』

傳受之目録

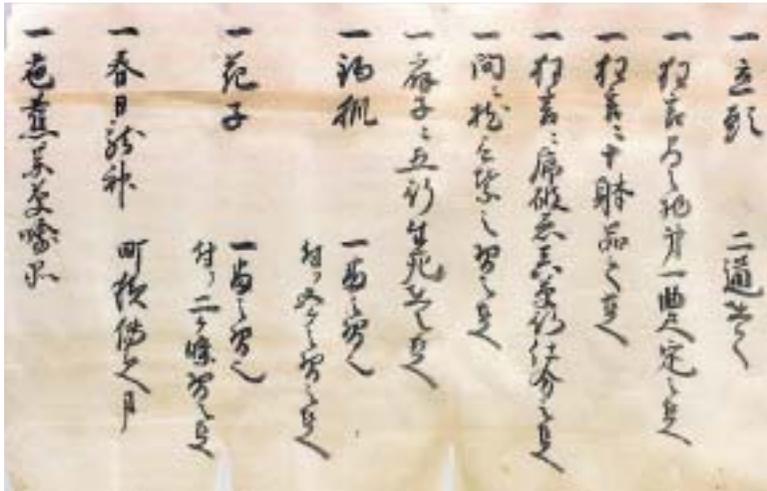
一 式三番之大事百三ヶ條

付初日三三四日舞替迄

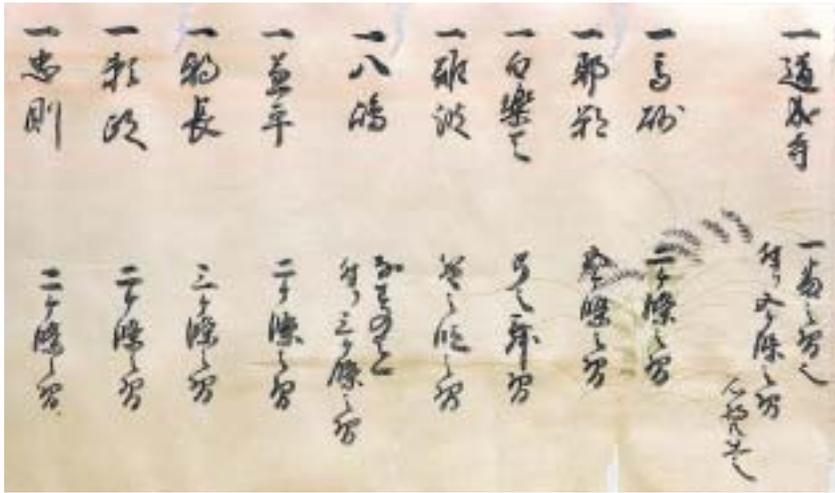
橋掛之舞様

三日目替之三番叟

風流習之事



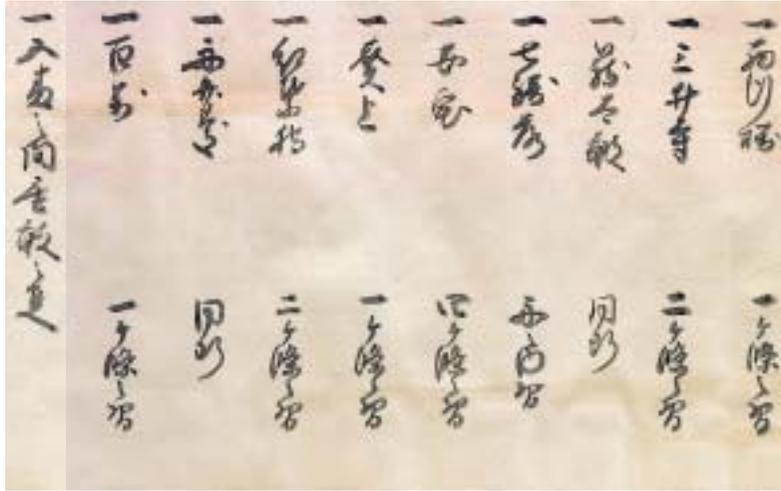
- 一 立頭 二道在之
- 一 狂言間之物第一曲尺定之事
- 一 狂言二十駄品之事
- 一 狂言二序破急真草行仕分之事
- 一 間二枕言葉之習之事
- 一 扇子二五行生死在之事
- 一 釣狐 一番之習也
- 一 花子 一番之習也
- 一 花子 付リ二ケ條習之事
- 一 春日龍神 町積傳受事
- 一 芭蕉 菓草喻品



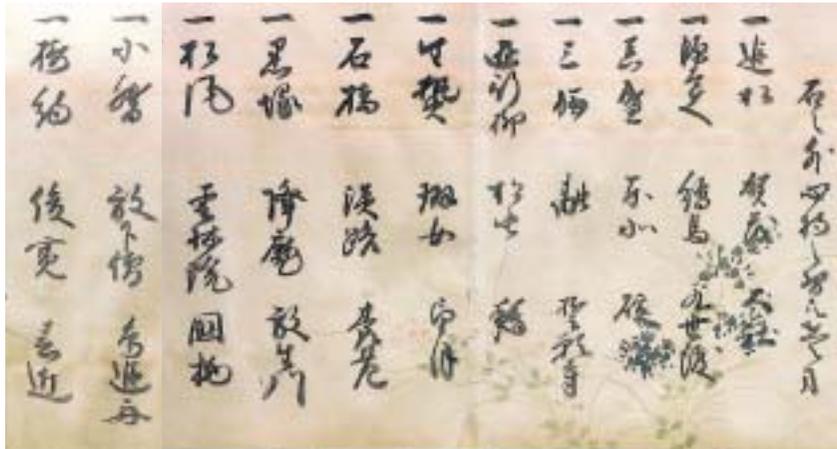
- | | | |
|---|-----|---------------------------|
| 一 | 道成寺 | 一番之習也
付り五ヶ條之習
心持共在之 |
| 一 | 高砂 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 邯鄲 | 五ヶ條之習 |
| 一 | 白樂天 | 弓之舞習 |
| 一 | 難波 | 笛之段之習 |
| 一 | 八嶋 | なすの与一
付り三ヶ條之習 |
| 一 | 兼平 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 朝長 | 三ヶ條之習 |
| 一 | 頼政 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 忠則 | 二ヶ條之習 |



- | | | |
|---|------|-----------------|
| 一 | 敦盛 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 鷓鴣 | 習もんたい之事 |
| 一 | 項羽 | 一ヶ條之習 |
| 一 | 船橋 | 同断 |
| 一 | 殺生石 | 同断 |
| 一 | 舍利 | 二ヶ條之習
其外心持在之 |
| 一 | 花月 | 一ヶ條之習 |
| 一 | 自然居士 | 小袖二習 |
| 一 | 土車 | 拍子二習 |
| 一 | 山姥 | 習多シ |
| 一 | 天鼓 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 藤渡 | 同断 |

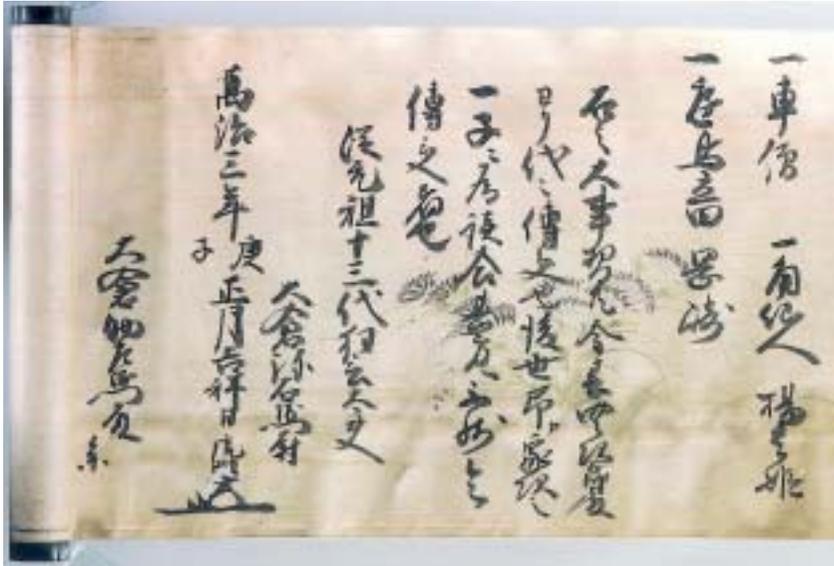


- | | | |
|---|----------|-------|
| 一 | 西行桜 | 一ヶ條之習 |
| 一 | 三井寺 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 籠太鼓 | 同断 |
| 一 | 七騎落 | 舟之内習 |
| 一 | 安宅 | 四ヶ條之習 |
| 一 | 葵上 | 一ヶ條之習 |
| 一 | 紅葉狩 | 二ヶ條之習 |
| 一 | 舟弁慶 | 同断 |
| 一 | 百万 | 一ヶ條之習 |
| 一 | 五番之間置鼓之事 | |



右之外心持之習共在之事

- | | | | |
|---|-----|-----|-----|
| — | 追松 | 賀茂 | 大社 |
| — | 源太夫 | 絵馬 | 九世渡 |
| — | 真盛 | 東北 | 碓潜 |
| — | 三輪 | 融 | 誓願寺 |
| — | 遊行柳 | 松虫 | 鶴 |
| — | 生贄 | 班女 | 望月 |
| — | 石橋 | 淡路 | 養老 |
| — | 黒塚 | 降魔 | 放生川 |
| — | 松風 | 雲林院 | 国栖 |
| — | 小督 | 放下僧 | 鳥追舟 |
| — | 接待 | 俊寛 | 春近 |



一 車僧 一角仙人 楊貴姫

一 庭鳥立田 岡崎

右之大事習共金春四郎殿

三リ代々傳受也。後世予力家次之

一子二為談合其方へ不殘令

傳受者也

從元祖十三代狂言太夫

大倉弥右衛門尉

萬治三年 庚子 正月吉祥日 虎明 (花押)

大倉助左衛門殿

参

【 Summary 】

Report on “Okura Torakiyo Kyogen Densho”
and “Okura Tora'akira Denju mokuroku”

ODA Sachiko

“Okura Torakiyo Kyogen Densho” and “Okura Tora'akira Denju Mokuroku” are both writings on *kyogen* in the collection of Yamamoto Tojiro Family of the Okura School that have been transmitted in the form of hand scrolls. Both are recently found, valuable materials dating to the early Edo Period that contain unique and interesting contents. (The present author has revised the original titles of each in order to avoid confusion.)

“Okura Torakiyo Kyogen Densho” (original title “Oboe”) was written by Okura Yaemon Torakiyo (1566-1646) and given to his second son Hachiemon Kiyotora (1610-1662) on March 3, 1641. It contains the 12 points one should keep in mind when performing *kyogen*. For instance, one should observe what has been taught or said from the past; one should not brood over a mistake made on stage. It also makes comments on the direction toward which the performer should look when on stage. The writer characteristically uses concepts that had been introduced from China and were popular at the time in order to explain these points. It is valuable as one of the oldest writings on *kyogen*.

“Okura Tora'akira Denju Mokuroku” (original title “Denju no Mokuroku”) was written by Okura Yaemon Tora'akira, Torakiyo's oldest son (1597-1662) and given to Okura Sukezaemon, who may have been a disciple of Tora'akira, in 1660. Although records show that Sukezaemon performed with Yataro Hidetora and Chodayu, Tora'akira's sons, not much is known about his biography. It contains a list of 43 kinds of *naraigoto* (difficult ways of performance that is especially taught with emphasis by the master) and a list of 38 *noh* pieces that contain other *naraigoto*. It is a valuable writing on *kyogen* of those days, certifying that the master has taught these *naraigoto* to his disciple, and shows how *kyogen* was transmitted.